

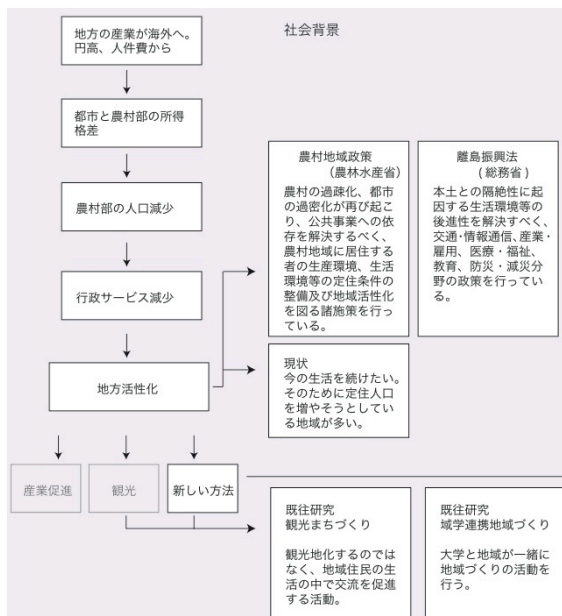
「デジタルなものづくり技術と土着の技術の融合による過疎離島の中期滞在者増加の促進に関する研究」より
「都市部学生の離島地域との交流活動の継続性に関する研究」
 ～鹿児島県口永良部島での活動におけるモノづくり分野と教育分野の比較において～

慶應義塾大学 大学院 池田靖史研究室
 政策・メディア研究科 修士2年 渡部 彩

■論文要旨

近年、離島や農村は人口が減少し、存続が危ぶまれている地域も少なくないが、その解決策として観光地化することや経済的に豊かになることや都市的利便性を得ることに対して疑問を抱く人は少なくないのではないかと考える。しかし、現状の策に対して取って代わるような具体的な解決策はない。具体的な方法はないが、新たな方法として大学生と地域との交流があるのではないかと考える。大学生の可能性に注目し、近年では日本全国で「域学連携」という大学と地域が活動をする動きがある。そこで、本研究では大学生と地域住民の関係性がどうあるべきか、ポジティブに継続していくための方法を明らかにするために大学と地域の交流活動について調査を行う。

■背景



■口永良部島プロジェクトの活動主旨

都市部と離島の交流活動を基盤とした教育分野と建築分野の離島の地域活性化

■研究の目的

- 1:産業促進や観光地化でない「地方活性化」のモデルを示すこと。
- 2:大学生と地域住民の win-win の関係性を示すこと

■研究の意義

「地域側に立った交流人口」が増加する可能性があると考えます。
 大学生が地域と関わり研究活動を行うことは、観光客とは地域住民と関わる時間の長さや交流の種類が異なり、深い関係性を持つ「地域側に立った交流人口」になりうる。大学生が新たな知り合いを招くことや、卒業してからも関わる人が増えることが期待できる。

■既往研究

観光まちづくり:「地域の生活者に主眼を置いた地域が主体となって自然、文化、歴史、産業など地域のあらゆる資源を活かすことによって交流を振興し、活力あふれるまちを実現するための活動」である。
 域学連携地域づくり:「大学と地域と一緒に地域づくりをする活動」である。日本全国の様々な大学が地域と取り組んでいる。

■研究の方法

本研究は大学生の「行動追跡調査」「ヒアリング調査」「アンケート調査」に基づくものである。今回は慶應義塾大学の教育を専攻とする長谷部葉子研究室と建築を専攻とする池田靖史研究室が行っている鹿児島県口永良部島プロジェクトに参加した学生を対象として調査を行う。2015年11月にアンケート調査とヒアリング調査を40人に対して行った。

■アンケート調査

アンケート調査で以下の項目について質問を行った。
 1:知り合いの地域住民の人数・親しい地域

- 住民の人数・会いにいきたい地域住民の数
 2:滞在の際のシーン別(挨拶回り・活動中・活動外)に交流した地域住民の人数
 3:地域住民との交流の種類別の頻度
 4:活動の満足度
 5:活動のモチベーション

■行動追跡調査

過去の資料とアンケート調査から「いつ・誰が・口永良部島に行って何人と交流した」のかを調べ、年表にし、経年変化を調べた。

■分析方法

「継続・関係性構築・満足度・モチベーションの概念はそれぞれ関係性があり、その関係性は循環している」と仮定した。

- 1:継続・関係性構築・満足度・モチベーションの概念を測るために示数化した。
- 2:シーン別の交流人数と交流パターンをクラスター分析でグループ分けする。
- 3:グループを継続度示数と関係性構築度示数で評価する。
- 4:継続度示数と関係性構築度示数の関係について分析する。

そこから、①継続的な都市部の大学生と離島の交流のために必要な交流の種類・人数・頻度・交流モデルを示す。
 それに加えて、

- 5:年度ごとの活動を満足度示数とモチベーション示数で評価する。
- 6:行動追跡調査で経年変化を調査。
- 7:4つの示数の相関や因果関係を分析する。

1～7の分析から②大学生の活動への満足度とモチベーションの変化を調査することで、継続的なプロジェクト活動のためのマネジメント方法を示す。

■示数の設定方法

- ・継続度示数

継続の度合いを表すために示数を設定する。

口永良部島に行った回数を1とし、プロジェクト活動が2年目の学生は、島に1回行くと、2と数える。3年目は1回を3と数える。3年目以降は、1回を3と数える。

計算例:2011年に1回、2012年に2回、2013年に1回、2014年に1回=1+4+3+3=8

- ・関係性構築度示数

アンケートの際に分けた人数の項目ごとに値を設定する。人数が多い項目ほど高い値をつける。

例:「顔見知りの島民の人数」の質問は

60人以上と答えた人が10

51～60人と答えた人が9

41～50人と答えた人が8

と値が下がり、最後の0～5人と答えた人が1とする。

建築チーム

No.	関係性構築度	継続度指数
1_1	22	6
1_2	12	1
1_3	20	6
1_4	14	1
1_5	9	3
1_6	19	6
2_1	12	3
2_2	9	3
2_3	9	1
5_1	10	1
5_2	6	1
4_4	7	1
4_3	8	3
5_3	6	2
4_1	13	7
5_4	7	1
5_5	9	1
4_2	13	7
	11.4	3

教育チーム

No.	関係性構築度	継続指数
1_11	18	3
1_12	15	1
1_13	5	1
3_11	16	3
3_12	20	13
3_13	28	7
3_14	17	6
1_14	24	14
5_11	14	3
2_11	15	30
5_12	10	2
5_13	25	9
1_17	20	17
1_18	26	23
	18	9.4

平均

建築チーム 関係性構築度:11.4

継続度:3

教育チーム 関係性構築度:18

継続度:9.4

- ・満足度示数

満足度は以下の8項目の質問を5段階評価で回答してもらった。満足度の1点を満足度示数の1とする。つまり、1人の満点は40となる。満足度は年度毎に回答してもらっているため、年度毎に満足度示数を出す。

I:プロジェクトの達成度

II:プロジェクトの研究目的に対する達成度

III:個人の研究目的に対する達成度

IV:経験の新規性

V:プロジェクト活動での地域の人との関わり

VI:個人の地域の人との関わり

VII:学生同士の協力

VIII:個人の学期を通しての活動

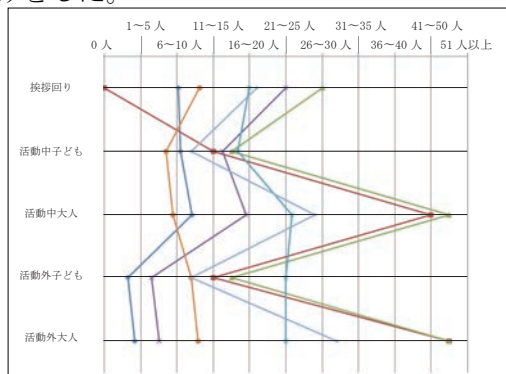
・モチベーション示数

-3 から 3 の 7 段階でモチベーションを回答してもらった。年度毎に比較をするため、春学期・FW 中・秋学期の 3 つの期間で、1 つ値が上がれば、1、2 つ上がれば 2 と上がった数の分、示数の値も上がる。値がそのままであれば 0、値が 1 下がれば -1、2 下がれば -2 とする。変化を示す示数とするため、初めのモチベーションの位置は加味しないことにする。

■交流人数と交流のパターン分け

・交流人数パターン

挨拶回り、活動中、活動外で関わった島民の数を大人と子どもで分けてアンケート調査をし、クラスター分析で、グループ分けをした。



	グループ1	グループ2	グループ3	グループ4	グループ5	グループ6	グループ7
挨拶回り	0人	6~10人	6~10人	16~20人	16~20人	16~20人	20~30人
活動中子ども	11~15人	1~10人	6~10人	6~10人	11~20人	11~20人	11~20人
活動中大人	41~50人	1~10人	6~10人	21~30人	21~30人	11~20人	41以上
活動外子ども	11~15人	6~10人	6~10人	6~10人	21~30人	1~10人	11~20人
活動外大人	41人以上	6~10人	6~10人	26~30人	21~30人	1~10人	41以上

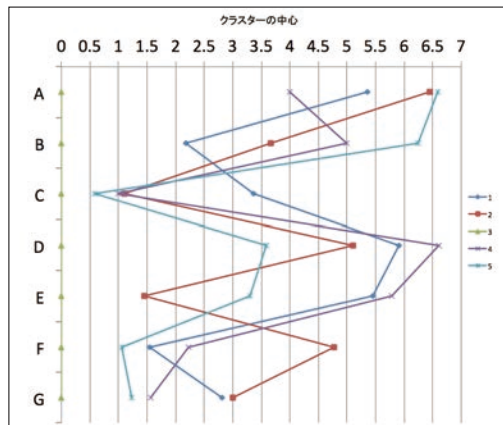
・交流パターン

現地での滞在の際の島民との交流方法を回数が多い順番に回答してもらった。

- A:活動に協力してもらった。
- B:口永長部島や屋久島の歴史や自然環境などを教えてもらった。
- C:家に泊めてもらった。
- D:ご飯、飲み会に参加させてもらった。
- E:お手伝いをした。(畑仕事など)
- F:自分の専門分野で知識知恵を教えてもらった。
- G:研究の調査対象として協力してもらった。

順位が 1 位の項目に 7、2 位の項目に 6、3 位の項目に 5 のように順位が 1 つ下がることに 1 つ値が少なくなっていくようにあてはめた。その値の順番のパターンを 5 つ

に分けた。



パターン①	継続度	関係性	パターン②	継続度	関係性	パターン③	継続度	関係性	パターン④	継続度	関係性	パターン⑤	継続度	関係性
A		A				D			D					
B		B				E			E					
C						A			B					
D									A					
E		D												
F		E				C			G					
G						B			F					
						F			G					
						C			C					
														ABCDEF

■結論

①理想的な交流人数パターン

仮定「人数が多いグループほど継続度が高い」

結果「継続度の 1 番高いグループ 5 は全体的に関わる人数が 20~30 人である。活動中もいつも協力してくれる主要な島民の有志の方全員と個人間の差がなく関わっている」

②理想的な交流パターン

仮定「継続度の高いグループは食事、酒席に参加させてもらったという項目の頻度が高い。継続度の低いグループは活動に協力してもらったという項目が高い。」

結果「継続度の高いグループは食事、酒席に参加させてもらったという項目に加え、手伝いをしたという項目が高かった。継続度の低いグループは予想通りの結果になった。」

③継続度示数と関係性構築度示数の関係

仮定「関係性構築度と継続度は比例に近い関係にある。」

結果「継続度が 6 以上になると関係性構築度が必ずしも上がる訳ではない。継続度が 6 の数値を出している人は、3 年間続け

ない限り1年に1回以上行っている学生という計算になり、1年に2回以上行くと島民との関係性構築度が上がると言える。」

④活動内容比較

仮定「各チーム専門分野の活動ができないと満足度とモチベーションが下がる。」

結論「2014年は最も満足度の低い年度であったが、専門分野の活動ができなくても2015年は満足度が高かった。夏のFW後のモチベーションも最も増加していた。2013年が最も満足度の高い年度であったが、秋学期のモチベーションは5年間の中で最も下がっていた。」

2015年は専門分野の活動ができなかったが、2つの研究会が綿密にミーティングを行い、意思疎通がしっかりできていたことで、学生が活動の目的や意義を理解しながら活動したため、満足度が上がったと考える。

⑤建築チーム意識調査

仮定「継続度や関係性構築度示数の高い学生はモノ(建築・プロダクト)の興味からヒト(コミュニティ)の方へ興味に移る。」

結果「継続度が最も高いのは、モノからヒトへの変化があった学生だが、変化しない学生よりモノへ変化した学生の方が継続度が高い。コミュニティ側に興味がある学生が最も継続度が高かった。」

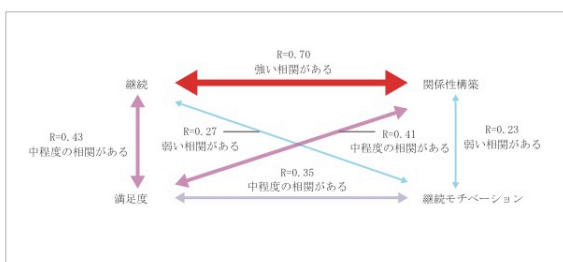
⑥行動追跡調査

・上級生やリーダーの満足度とモチベーションが高い。→自分が当事者として地域住民とコミュニケーションを取っているからと考えられる。

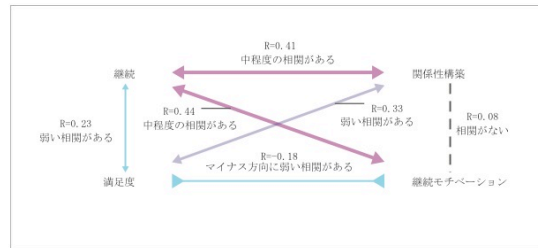
・秋学期になると必ずモチベーションが下がる。→具体的な活動はORFしかなく、島民と交流する活動がない。

⑦4つの示数の関係性

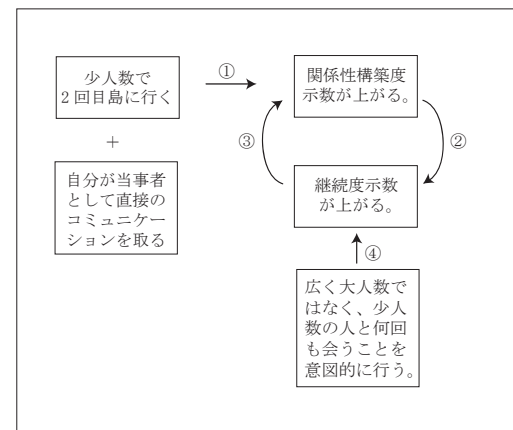
建築チーム



教育チーム



■地域住民と大学生の交流の在り方



1:少人数で現地に行くことが必要である。また、当事者としてコミュニケーションを取ることができると継続度が上がる。

2:継続度が向上するには、少人数の現地住民と深く関わるのが大切。マネジメントする側の人は、意図的に同じ人に会うようにするなどの工夫が必要。

3:現地に行った際に「食事、酒席の参加」「手伝い」のように地域住民が地域の生活の中の体験を提供し、大学生はその生活の手伝いをするなどどちらだけがやってあげるのではなく、相互的に助け合うことが必要である。

まとめ

「1:大人数のFW以外に少人数で1回でも現地に行くこと。」

→③示数の関係性から

「2:自分が当事者として直接地域住民とコミュニケーションを取る。」

→⑥行動追跡調査から

「3:知り合いは多ければ良い訳ではない。広く浅くではなく、深い関係性を築くことで、地域に入りやすくなる。何回も同じ人と関わることを意識して行う。」

→①理想的な交流人数パターンから

「4:学生が協力してもらっただけでなく、

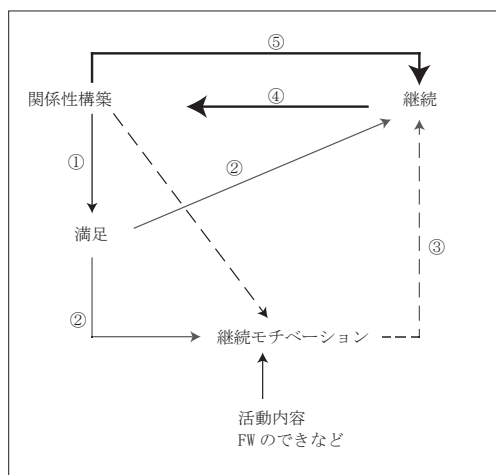
地域住民の手伝いなどをする相互の関係性が必要。」

→②理想的な交流パターンから

■プロジェクトマネジメント

概念の関係性のモデル

建築チーム

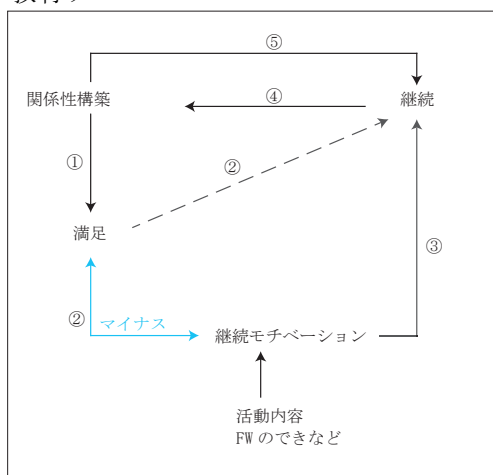


1:関係性構築ができると満足につながり、それが継続・モチベーションに繋がる。

2:関係性構築が継続に繋がり、継続が関係性構築に繋がる。

3:モチベーションが上がっても継続に繋がることは少ない。

教育チーム



1:建築チームに比べ、全体の概念の関係性が薄い。

2:満足とモチベーションはマイナスの相関があり、満足するとモチベーションが下がる・満足できないとモチベーションが上がる学生がいると考えられる。

3:活動内容でやりたいことができそうだと継続モチベーションがあがり、継続度が上がる。他の概念はあまり関係ない。

まとめ

「1:建築チームは設計段階から島民と関わり施工の際も交流する。」

→⑦4つの示数の関係・⑤建築チーム意識調査

「2:口永良部島の歴史、自然、コミュニティを知るための活動を行う。」

→②理想的な交流パターン

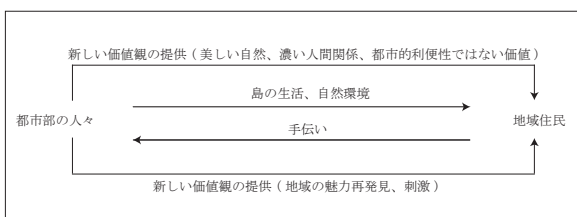
「3:夏期FWに向けて活動するのではなく、年度を通じて島民との交流の中で活動する。」

→⑥行動追跡調査

「4:学生同士の協力・関係性は満足に関係する。建築チーム、教育チームの意思疎通をしっかりと行う。共通の目的を明確にする。」

→④活動内容比較

■考察 都市部の人々と地域コミュニティの交流



大学生の満足度アンケートで「経験の新規性」は常に1位であった。自分が住んでいる地域以外で活動を行うことに対して、何かしらの「新規性」を得ることを求めている。その「新規性」はお互いの新しい価値観の共有であると考えられる。

■口永良部島プロジェクトの展望

・大学生版地域おこし協力隊の存在
大学にも地域にも精通している存在が重要。そのためには、長期滞在ができるようなカリキュラムが必要。

・地域住民も都市部に招く相互の交流

現状は地域が活動することにフォーカスが当てられているが地域住民を都市部に呼び、関係性構築をし、そこでできた知り合いをまた地域に招くような交流が必要である。